

吉野卧城著

野茨集



75

70

65

60



天

剛



吉野臥城著

野茨集

尚文館發兌

吾が祖母君の靈前に  
この冊子をさし置く

序

「野茨集」は「小百合集」の後集なり。多少の野趣はあらむも、いまだ天風の韻ウタはあらざるべし。

乞ふ、誰れか來りてわが胸にその手をあてよ、胸は將に裂けむとすなり、心の悩みは病のろれよりも苦しと知らずや。よし聲をあげて叫ばむも、世の人は唯狂と笑はむ。それきくものは天か、答ふるものは地か。否、かゝる時に當りて我を慰むるものは涙あるのみ、詩あるのみ。あゝ酒によらずして、詩に慰めらるゝものは不幸か。君はこれを樓上の美人にきけ、われは野畔の瘦花に問はむ。

明治三十四年晩秋

著者識す

凡例

- 一 前集と同じく、その作せし年月の順序を以て編せり。これいさゝか思ふところあればなり。
- 一 集中の多くは東京獨立雜誌、造士新聞、小天地、聖書之研究、心の華等によりて既に世に公にせしもの。
- 一 舊作の今より見れば、中にはあかぬ節も多かれど、そのまゝ載せつ。

目次

詩 狂	.....	一
新秋の賦	.....	二
暮秋の賦	.....	七
雀	.....	三
瑞鳳山	.....	一六
鼠の愁訴	.....	二三
荒村行	.....	四〇
義人の聲	.....	四九
某氏に與ふる歌	.....	五四
悲む勿れ妹よ	.....	六五

圍爐裡の親子……………七二

小百合……………七七

朝露の歌……………八四

耶蘇降誕祭……………八九

嵐の歌……………九三

新世紀の歌……………九八

土井晚翠君を送る歌……………一〇八

麥かり……………一二六

清 怨……………一二三

愛宕山に登る歌……………一二八

立秋吟……………一三五

田園雜詠

其一、人に答ふ……………一三七

其二、葡萄を贈られしを謝する歌……………一三八

其三、美しき夢……………一四一

其四、桐の葉裏に書きつけたる歌……………一四五

其五、さらば……………一四七

回顧吟……………一四九

朝 顔……………一五一

渾圓球上平和の曲……………一五二

宮城野に立ちて……………一五九

清風明月行……………一六一



村の家……

一六



野 丞 集

吉野臥城著

詩 狂

面は芙蓉の露にうるほひ  
 眸は明星湖水にかゝやき  
 あけゆく希望の汀に立ちて  
 つくづく見惚るゝ詩人ひとり

詩神のいとし子清けき彼れは  
 浮世の千衢に幸薄うりき

目しひ等かれの笛を破りて  
集をひき裂き嘲り笑ふ

人のあざけり罵りたふへ  
黙して力の弱きを泣きぬ  
自然の生命の捕へがたきよ  
胸をいたむる冥想の君

### 新秋の賦

夏の暑さにくるしみて  
やせたる庭の朝顔に

露のさかづき含まする  
佐保姫の裳の萩の葉に  
ふれて音ある秋風の  
聲調をきけと生命ある

池に紅蓮の花おちて  
さびしく残る實の上に  
鳴く翡翠の細鱗を  
かろふる影をさかしまに  
うつせる水も底すみて  
きよき心にかへりけり

あふげば雲の末までも  
研ぎすましたる如くにて  
すゞしさうかぶ山の眉  
えみ傾けしごとくにて  
げに静なる慰籍なぐさの  
光あまねしあめつちに  
かの明星のかゝやける  
めぐみの露にとみがへり  
頭もたげし野の花の

千種ちかたの色を尋ねれば  
憂うれひある身も香に酔ひて  
しばし忘れぬ塵の世を

あゝ新秋の野の景色  
その美を何にたとひまし  
露よりのぼる月の夕  
霧にあけゆく風の朝  
涼しさのみぞ吹きみちて  
こゝら快樂けつらくのおふるめり

旅ゆく人も立ちせまり  
こゝに渴ける慾を慰し  
牧草刈る子も鎌をすて  
智慧なき身をば歎きつゝ  
秋のほひをかみしめて  
自然の味をたゝふゐな  
げにや自然は野に山に  
こゝらあふれて美しき  
詩人の筆をまつものを  
知らずや悲しきびしとて

涙の歌に身をやつし  
死語をつらぬるはかなさよ

### 暮秋の賦

てる日の熟に苦める  
夏よりわれを救ひにし  
秋のとはひの早老いて  
いたましいかな暮れむとす  
ミューズの宿を彩りて  
時めきたりし八千草の

花いつしかにうつろひて  
句はぬ風の寒きあな

浅茅に鳴きし蟋蟀せせりの  
涙の跡の消えゆけば  
人まつむしの聲かれて  
秋の調べもたえにけり

破れて残る柿の實の  
三つ四つ赤き上枝かみより  
とび去る鴝の一聲は

しのぶ歌のや行く秋を

葡萄の棚の下がくれ  
ゆかり色濃き一房ひとむらに  
たもひの味をかみしめて  
えみし其の日の戀ひしやな

みやまに拾ふ柴栗の  
しばし浮世を忘れつゝ  
罪なきことを語らひし  
秋の日ひ和ももありけるに

翼にのりて逸早く  
時の光になつかしき  
名残は遠く隔りて  
又も逢ふべき時やある

おもひにあまる淋しさに  
外面おもにおりて眺むれば  
みだれて咲ける白菊や  
花に色あり幾千代の

こはなつかしの白菊よ  
精をあつめて醸したる  
甘露の酒を白銀しろがねの  
杯はもてわれに含ませよ

あゝ酔ひもせば行く秋を  
悲む胸もしづまりて  
あたゝかに湧く血の中に  
その淋しさの消ゆべきに

こは情なし木枯よ

心やさしきさほびめが  
織れる錦のみぢ葉を  
みまがら拂ひつくしけり

かゝる景色に戦きて  
立てるわが身は足も冷え  
吐くや吹息をうるほして  
おつる涙のたえざるを

いたましいかゝる雨の中に  
淋しく暮れて行くとても

あゝ熱情の戀人よ  
快樂をうばふこと勿れ

(明治三十二年暮秋作)

雀

黄金のひかり朝彦の  
さすや拜みていたづらに  
忠と叫ぶは偽善者の  
その聲にしも似たるかゝ

稻荷の神祠藪の陰

儕輩ざいはいこゝら集りて  
何をか騒ぐをりをりは  
風のそよぎに潜みつゝ

人なき時を見はからひ  
百も嘯さへつりにさへづりて  
媚ふるが如く羽はをのして  
瑞穂にわらふ一しきり

東にさけび西に鳴き  
成す事もなく翔けめぐる

もとより餌えのためなれば  
はては争ひはては打つ

夕ふべの雲の雨となり  
降るやはらはら秋の空  
變るも早き世の中は  
昨日の友よ今日の仇

捨てられしをば悔い老して  
鳴くは天賦の身あらぬに  
権家の門に忠を鳴く



雀を見ずや憎むべき

### 瑞鳳山

或日瑞鳳山下は行吟せる詩人あり、こは誤り  
て政黨の渦中よ漂ひけるも、今やその腐敗よ  
失望して黨籍を脱したるもの、堪へがたき  
懊惱を慰むとにやあらむ。

若かき黨派の

外に立ち

正義の筆を

ふるはなむ

かく叫びたる詩人は

瑞鳳山の夕風に

こぼるゝ光ちる紅葉

うち詠めつゝ下りけり

げにうるはしの

自然やあ

人のこゝろに

くらふれば

口ずさみつゝ立ちとまり

感慨に堪へぬ風情よて  
やがて來かゝる廣瀬川  
巖の上に立てる見よ

瘦せしおもわをふりあげて  
われどわが身を嘲笑ふ  
紋付羽織いく秋の  
雨風よしも揉まれけむ

あゝ世は腐り  
人くさる

何を生命よ  
すむべきか

あゝとばりよ吐く氣息の  
たちのぼりゆく雲のごと  
空しく消えて慰籍の  
光かゞやく身のわたり

さらば湧き立つ  
むねの血の  
あかきを紙に

そゝがさむ

かりに下界に

身を寄せて

ミュージズの前に

悔いばやな

ひとり虚空そらにうなづきて

溢るゝばかりよろこ喜びよべば

遠く木立の奥おくふのみ

靈廟たまのあたに聲こゑをずる

よばふは何ぞ

山やま精ひまか

語るは何ぞ

ゆく水みづあ

水と山とを樂みて

心の塵をわらひつゝ

住むや定めし詩人うたが

見やるひとみの美しき

なほ一しきり吹く風に  
光こぼれて木の葉ちる  
梢に來鳴く鳥がねも  
天使の曲とまがふかな

### 鼠の愁訴

序

罪を犯していつの世も  
儂なき身とはなりにけむ

世におそろしき盗人が

暗に斫り入る白刃の  
それにも似ゑる牙をどぎて  
物うち砕きうち破る

煤うづたあきうちばりの  
うらに潜みて時のまも  
心の波のたちさわぎ  
恐怖の眼を開くなり

宿の寐息を窺ひて  
神棚づたひ廚へど

歩めば棗こに猫ありて  
をどるや早き爪揮ふ

板戸の隙をとめゆけば  
畏あり鐵の網ありて  
夜目にもしるき油揚に  
死出をいざなふかをりあり

畏をのがれて菅の根の  
長尾うちふりうちふりて  
黄金の盃をかみ破り

うはべを飾る衣を裂く

世に憎まれて恨まれて  
白日よあふべき幸もあみ  
ひとり悒鬱にたへせして  
夜陰よかくれてきよと鳴く

其一

ある夜竊に巢を出でて  
戸外にあさる鼠あり

影をしのびて暗を踏み  
そとぐ小笹の霜風に  
耳をすまして見張りしが  
屑舎の方へ走りけり

物もやあると積みあげし  
糞糞<sup>糞糞</sup>噛み裂き噛み切りて  
くゞりつ出でつ嬉しげに  
汚穢<sup>汚穢</sup>をくらひ塵を吸ふ  
餌のあるとふる呼ばねども

一疋二疋のせひ来て  
冷たき足を舐りつゝ  
楽しき地やとゑらぐめり

たどへば唄ふ浮れ男の  
酒に狂ひて酔ひしごと  
眼はくらみ脳やみて  
いづふも暗し世の中は  
その楽しさも春の夜の  
花より淡き夢よして

甘かりし餌は身をやぶる  
げにおろろしの毒なりき

鼠は毒と白泡の  
苦しきを吐きつよるめきつ  
無念の齒牙をくひしめて  
枯芝の上<sup>へ</sup>にたふれたり

たちまち雲の脚早く  
かなたにねらぶ猫の聲  
こゝらをねらふ霜風は

なぶるが如く寒きかあ

其二

可憐<sup>かた</sup>や霜にたふれたる  
鼠を醫師は見出しぬ

黒死病はびこる頃なれば  
もしもや毒よくるめきて  
斃れたるにはあらぬかと  
おもわをかへて怪めり

つばらにこれを撿ぶれば  
まがふ方なくうれなりき  
たけき鼠も患ひては  
彼處にたふれ此處に死ぬ  
かばねを土に葬るも  
毒の翼の風を得て  
東にをどり西にまひ  
人の生命を襲ふなり  
そのゆくどふる木枯の

落葉を吹くよ異ならむ  
即治さむよどの難くとも  
豫防がむすべはふゝにあり  
けがれを包む綿をやき  
ひろむ鼠を狩りつくし  
人の往來をさへぎりて  
試みるより外うなき  
仰のありし朝より  
世は立ちさわぐ五百津波



のがるゝ鼠きゝと鳴き  
穴より穴に狂ふかな

其三

市にかくるゝ詩人よ  
老いし鼠の愁訴ふらく

火のあるところ

けぶりあり

汚るゝところ  
やまひあり

身よりおこると

知らせして

われ等につらき

世のあかや

もどより毒の

あらねども

汚穢けよふれて

得つるなり

毒得しものを  
ほふらば  
知るか疾病を  
避け得じと  
世にくすしあり  
いくすり  
興へて世をば  
すくへかし  
毒なきをさへ

うたがひて  
たゞにうしなふ  
おそろしさ  
あゝ世は鬼の  
すみかぞと  
今ぞ知しける  
世のあかを  
あゝ熱情の  
うたびとよ

その湧きかへる  
血を吐きて――

たとへば波のすさび来て  
巖を砕くかのどく  
胸にあふるゝ悲しさを  
うち口説きては啜り泣く

かれの思の迫るとき  
牙を噛み爪をむき出して  
世の或物を破りなむ

勢たけき姿あり

われを忘れて聞きあたる  
まだうら若き詩人は  
暗に走るを見ねくりて  
あしたの空に叫ぶかな

情も知らぬ爲政治家は  
鼠にさへや憎まれて  
匙を生命の醫師等は  
鼠にさへやうとまれぬ

左手ひだりてに法のりを提ひげて  
右手みぎてに劔けんをかざしつゝ  
民たみにのすめは野のはあれて  
流ながるゝ水みづの濁にごるめり

ながれの末すえにたたり立ちて  
盃はひをふくめば白銀しろがねの  
中なかにひそめる黴菌カビは  
腸腐くたす世よの人の

黒死病くろしちびょうは人を殺すのみ

あゝ鼠ねずみよりたろろしき  
毒どくを傳つたふるけだものは  
亡なさむとすよき國くにを  
匙しふりあげて恐れつゝ  
ちさき鼠ねずみをうたむより  
黄金きんごの前まへに尾おをふりて  
なくけだものを除はずけかし  
うそぶく空そらに雲くも消きえて  
花はなやかたさす朝日あさひかけ

けだもの、病、たえはて、  
民の榮えむ時をまつかな

(明治三十三年十二月作)

### 荒村行

古葉こぼるゝ垂柳の  
長き堤をゆきなやみ  
夕日の前にすめば  
かはるも早き織雲の  
彩にうつろふ風の色

そよぐ芒に野葡萄の  
はひ交りてゆかり濃き  
千顆万顆の房の味  
吸ふか阜蝨の鬚立て、  
何をか語る葉がくれに

神の秘密を探らむと  
寄れば足元草深く  
拂ふ袂にねどろきて  
秋お瘦せたる蜻蛉の  
とびてゆくへの覺束な

かれ休息に榮はたる  
大木はもとのまゝながら  
語らひ笑ふ聲たえて  
鳥打つ人の影もなく  
一羽の鴉餓に啼く

われも憂愁ま堪へかねて  
徑路づたひさまとへば  
唯荒寒の身にしみて  
見ゆるかぎりは草高く

いづるか虫の野ならざる

黄金の筵敷きなめむ  
稲のみいは夢のほど  
きえてはかなき泡沫の  
みだれて狂ふ洪水に  
何か稔らむはたつもの

菜は悉く腐りはて  
豆悉くひあらびて  
稗田一畝歩それさへに

風よみのらすかみひたる  
蕎麥も流れてなしどかや

民の草庵は傾きて

食を呼ぶ子の聲細し

今はた賣りて米にせむ

衣はもとより夜を凌ぐ

薄き衾もあらずして

僅にうめる柿の實に

餓をいやせば肥にし身も

いつしか骨のあらはれて

鋏を揮はむ力なく

たゞにその日を過すと

みゝに赤痢の流れ来て

村より村を襲ひゆく

魔王のあらび凄けれど

黄金ならずして醫師なく

柩をたくる恨かな

恨は長し肌寒し

あれたる畠を耕して  
麥を蒔くべくなりぬれど  
村は疲弊れて蓬生の  
繁るにまかす悲しさよ  
あゝ民こゝに惱めども  
情を知らぬ世の人は  
官にれもねり利に狂ひ  
黨争にのみ區々として  
かへりみざるか此民を

見よや胡蝶を屠りたる  
蜘蛛は雀に食まれたり  
蓬に民を葬りて  
名利の花にたのれのみ  
時めくべしと思へるや

さあり清けきわが民は  
狂ふ人には頼らずとも  
神の光に救はれて  
やがて苦惱も癒えやせむ  
鍬を取るべき身とありて



既<sup>も</sup>往<sup>り</sup>をねもひ現<sup>い</sup>在<sup>ま</sup>を見て  
泣<sup>な</sup>けば泣<sup>な</sup>くほど尊<sup>た</sup>くも  
畏<sup>おそ</sup>き露<sup>つゆ</sup>のみぼほれて  
ながむる荒野<sup>あらかし</sup>未<sup>ま</sup>遠<sup>とほ</sup>く  
美<sup>う</sup>しく刺<sup>さ</sup>す夕<sup>ゆふ</sup>日<sup>ひ</sup>かけ  
光<sup>ひかり</sup>を出<sup>い</sup>でて草<sup>くさ</sup>に入<sup>い</sup>る  
大<sup>おほ</sup>川の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>白<sup>しろ</sup>うして  
東<sup>あづま</sup>に走<sup>は</sup>るひどすぢは  
咽<sup>なご</sup>ぶが如<sup>ごと</sup>く泣<sup>な</sup>くがごと  
過<sup>あま</sup>ぎ來<sup>き</sup>し罪<sup>つみ</sup>を悔<sup>く</sup>ゆるごと

をりしも涙<sup>なみだ</sup>る船<sup>ふね</sup>の帆<sup>ほ</sup>に  
「寶<sup>たから</sup>」どか<sup>か</sup>ける文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>一<sup>いつ</sup>つ  
幸<sup>さい</sup>をば村<sup>むら</sup>は運<sup>こ</sup>ぶとや  
あゝ美<sup>う</sup>しき寶<sup>たから</sup>とは  
民<sup>たみ</sup>の心<sup>こころ</sup>をいふならむ

### 義人の聲

あゝ、荒寥<sup>あらかし</sup>たるかな、この村<sup>むら</sup>。西<sup>にし</sup>は落<sup>お</sup>ちゆく月の  
色<sup>いろ</sup>を見よ、涙<sup>なみだ</sup>をのみて泣<sup>な</sup>かむとするよあらず  
や。なまがしの川<sup>がは</sup>にそひたる野<sup>の</sup>末<sup>すえ</sup>の伏<sup>ふ</sup>屋<sup>や</sup>に夜<sup>よ</sup>  
もすがら灯<sup>あかり</sup>の消<sup>き</sup>えざるは何<sup>なに</sup>ぞ。心<sup>こころ</sup>あるものは  
訪<sup>たず</sup>へ、而<sup>しか</sup>して鶴<sup>つる</sup>の如<sup>ごと</sup>く瘦<sup>すく</sup>せし翁<sup>おきな</sup>の爐<sup>いろり</sup>邊<sup>へ</sup>に女<sup>むすめ</sup>と  
語るを聞<sup>き</sup>け。

女

よの頃の噂あやしも  
背の君はいかにあるらむ  
二十日経ていまだ歸らず

事<sup>を</sup>了へばはやもかへらむ  
かへり来て村に告げむと  
いひ残しゆきけるものを

翁

午<sup>の</sup>下<sup>り</sup>た<sup>ら</sup>ぶ<sup>ね</sup>きた<sup>り</sup>て

物知りの茂作かたらく  
罪あき<sup>に</sup>捕はれてけり

歎く<sup>あ</sup>どいひて指折り  
上<sup>か</sup>村<sup>むら</sup>の書記の仁助と  
同<sup>ち</sup>伴<sup>ばん</sup>みたり繩まかへれり

女

わがために悲みはせず  
せの君のよし<sup>か</sup>へらずも  
畑打ちて畑は立てむ

飢に泣き病にやせて  
みやこべの便たよりきかむと  
村人の待てるよいかに

翁

さきつ日の騒ぎ叫びに  
肉さかれ骨くだかれて  
うめくかも、村にいくたり

傷なきは罪を蒙り  
とらはれて獄むせ舎やに下り

あはれむも亦罪なはる

女

村は荒れ魔ははびこりて  
日に月に暗は世をたほひ  
年々に人を瘦せゆく

年々に村は荒れゆく  
いつの世か幸福さいふわきて  
いつの世に田は稔るべき

翁

のうれ賤泣いてたもるな  
義しきは獄舎出づべく  
神かけてわれは祈らむ

ねがはくは村よ幸あれ  
あゝ神よ犠牲たるべくは  
老いし身をわれは捧げむ

某氏に與ふる歌

花の一片池に落ち

織るや波紋のくすしきを  
花のゑらぎと見たまふか  
水の怒と見たまふか

情に強き君なれば  
小石をとりて池にうち  
その音をきゝて冷かお  
心なしとやわらふべき

曾ては朝の逍遙に  
露をふくめる花瓣の

あかきを口にねしあて、  
なきしよひとりぞみて

いそぐ旅路の上り坂

叫ぶ蛙の聲こゑきいて

茨いばらの中にくちなはを

うちしやいつの夢なりし

やさしき心花に泣き

強きをくたく胸の火の

もゆるに堪へず膝をうち

世をのゝしりし人は誰ぞ

わかれてこゝに三箇年

はしなくあひし昨日より

幸さいわいある君の身の上に

あつき涙を濺ぐかな

川の流も年ふれば

淵瀬の變るならひあり

いつまで人の若くして

かはらばあれと願はむや

絲瓜を植ゑて夕顔の  
花をのぞむは鳥澁ならむ  
天に誓ひしまごゐるを  
すて、悟ると誰れかいふ  
世をのゝしりしろの舌に  
世辭追従をならべつゝ  
あやしき金を貯へて  
やめよ非を蔽ふ作りごと

もとより旅にさすらひて  
家居つくらず獨身の  
われ詩に瘦せて金なきを  
君幸なしといふなかれ  
雲の紫ほのぼのと  
あけゆく空の色を見よ  
野鳥は曲をかなづるに  
耳傾くる能ありや  
あはれ權家に尾をふりて

乞ふ三鞭しんぱんに味あるか  
男子の心もしあらば  
硝子ガラスの杯はいを粉に碎け

車も乗りて驅けるとも  
馬とり劣る心根こころねに  
八字の髻は三毛猫ねまの  
その鬚すげにやは勝るべき

それよ昨日きのふも酔ひしれて  
君きみ、妹いもうと叱る言の葉に

見せじと顔をそむけつゝ  
すゝり泣きしといかばかり

「起居知らずか村育ち  
客のいますゝ何を泣く  
去ねよ於多福外おたふくぐわいに立ちて  
涙を風よはらはせと」

れもひても見よ二十年  
七つの年の二月をり  
たが手のうちにはぐくまれ

誰が懐に育ちたる

犬かつ恩を知るといふ

むつびかはして影となり

形となりていろしめる

吾妹の情わすれまじ

あゝ酒ゆゑといふ勿れ

心にふくむことなくば

酔ふとも出づる言葉かは

君とかざるなあやまちを

かの孝行を子に強ひて

娘を廓に賣ると聞け

たれか無慈悲を憤り

かれを哀れと思はざる

例へば鬼のすだくごと

唯わがまゝにふるまひて

罪なき妹を苦むる

行爲はふれに似たらせや



ろれ野の花よひそむども  
臭さは臭しくちなはの  
清き血汐のわくあらば  
躬みの汚れしを悔ゆべきに  
擡ぐるかうべわれうたば  
君は怒らむ火を吐きて  
情しやうないかな五尺ごしゃくの兒こ  
心はすでに腐れしか

まことを聞くの耳しひて

あゝこの聲のとほらずば  
たゞ宵暗よひぐらみにさまよひて  
危き道を踏めをかし

悲む勿れ妹よ

昨日きのう海あれ松鳴りて  
窓うつ風のものすこく  
ふりそゝぎたる雨はれて  
今日けふの日かげのうすれゆく  
二筋なびく白雲の

ちぎれて遠く消え去れば  
しづまりかへる空蒼く  
夕星西にきらめけり

笛のきこえしゆふべとリ  
三年を空にあくがれて  
戀になやめる女子は  
家に今はの床にあり

花をふくみしくちびるの  
くれある匂ふ色あせて

星の如くにかゝやきし  
睡もいまは力なし

はぢを帯びたる耳たぶの  
あたゝかなりし血は冷えて  
艶なき髪るのふりかゝる  
おもわも痛く瘦せしかな

高きたもひをたもひにて  
緒琴をにふれしろの指の  
あゝよしもなく顛わなきて

戀のしらべをこゝろみぬ

しらべはやがて薄命の

えにしにの絲をひきむすび

たのしき春を夢みつゝ

胡蝶とまひぬ垣の外

花のかをりのかゝやける

日かげ短く暮れはてゝ

戀はむなしき紫陽花の

花より薄くあせにけり

幾度そたび少女氣の

そのあやまちを繰り返し

慈悲いと深さちゝ母に

わぶる聲さへうちしめる

清くたふとき師の君の

教訓をすてしやましさを

かき口説きては噺り泣く

涙あふれてせきあへず

今しも響く鐘の音に  
細きかひなをさしのべて  
何をか探る風情にて  
かすかに姉の名を呼びぬ

「あゝ罪多き己が身の  
生命もかくて消ゆべきか  
罪になやみし己が身の  
許さるべきか神の前」

「悲むなかれ妹よ」

みまもる姉はなぐさめぬ  
聖の書をとりあげて  
その一節を口ずさみ

窓の小笹のさゝやきに  
露はらはらとこぼるれば  
さめる面わのさながらに  
いけるが如く目を閉ぢぬ

歎きあまりし父はゝの  
今ひとたびと抱けども

靈魂遠くとび去りて  
残るむくろに言葉なし

世に言葉なき亡骸の  
土にかへりて花咲くも  
神を慕ひしとこしへの  
ねぶりの上に幸はあれ

圍爐裡の親子

涙すゝりて語るをきけば  
「弱り目にこそ崇りめは

來れ」と示せしこの平凡の  
言葉にあるよ深きあぢはひ

圍爐裡にふたり娘と母と  
母は痛くもやみわづらひて  
枯木の岩に倚るごとく  
こまじほの髪雲とみだれぬ

娘十八すゝしきまみに  
ふくめる露やしたゝらむ  
白葡萄あり廣葉のかげに

光をさけてかうべをたれぬ

梢ほたさしくべて烟にむせび

幼な馴染も早ひとむかし

今は地主ぢぬしのお婿さま

吾あを苦むるおにおにしさよ

恩に報ゆとおこせたる

少しばかりの黄金あかねを楯に

毒の矢の根に心を射まく

近寄る息は遠呂知とろちに似たり

文字もじ書くすべは知りてあれども

虚偽いつはりかゝむ筆はとらなく

つゞれをつゞる針今どるも

妾めかけとなりて錦は縫はず

母はうれしさ心にあまり

よくころいへれいとし子よ

隣家となりの娘名はた葉は

綺羅を飾りて親にほこりき

されども村の爺おぢおうな  
あはれの子よと指さし笑ひ  
こゝの醜けが汚れのひとつに敷へ  
疫病びやくよりも厭いとひてありき

國の黄金かねを皆あつむども  
なほ明星の光に若かじ  
心づくしのよろほひも  
野に咲く百合の花にやまさる

こゝのみたのが住家すまかは

庵いほも賣らむ屋敷もうらむ  
負債おきなつくなひ唯安らかに  
さろふまことの里に到らむ

### 小百合

たどへば巨人の高塔に立ち  
鬱憤うらみに腕を拱こくごとく  
かの群山むらみの上うへにうびえて  
自然の吐くか奇くしき吐息の  
烟にかくるゝ吾妻山あり

閻王の舌さながらの雲  
ゆふべいくたび西に沈みて  
天女裳をひく紫の雲  
あしたの空に帳幕を垂れぬ  
山の姿はうるはしかりき

水は流れて谷より谷に  
響は玉のさやぎに似たり  
又琴をいはむ樂人を説かむ  
かれ世を知らぬ姉妹は  
薪を樵りてこゝらに住めり

塵に汚れぬ二人の眼は  
あけの明星空にかゝやき  
露の蓮もたもなかるべく  
のぞみの光は眉にきらめき  
平和の泉は胸のうちに湧く

されど二人は身を知らざりき  
いつしかさそふ峯の嵐は  
光をつゝみ泉をみだり  
暗き谷間に流はむせび



狂うて夜の野をさまよひぬ

山にありてはすなはち山精  
いばら刈るべく鎌は手にあり  
口に嘗むべく木の實はうめり  
香木かきにほふ日はあたゝかに  
かつて愁うれひしことはなかりき

雨がふる降る籠は曇る

會津の里や雲のいづこ  
逢あはひ願ねがひの絲染め出でし

若き血汐の躍りをどりて  
あゝ張りさけむ胸のねもひ

身はくちなはの臭きを踏みて

草より草のしげみをたどり

耳もしひたるいもうどが

薊の花の蜜にねぶりし

その夜の夢は安からざりき

わかれてひとり行方を慕ひ  
一人の愛を尋ねてまよふ

山の住家を思ひ出でては  
野邊に首ふる花の香に泣き  
岡にのぼりて墓碑に躓く

奥津城どころそは死の谷か  
わらず秘密のさゝやくところ  
生命の光きらめくところ  
愛の泉のわきづるところ  
罪ゆるされてゆくべきところ

さなり悪魔にもてあそばれて

あたゝかに薄く血を冷さむや  
おゆびに胸をうと伺へば  
ゆるやかにうつ太鼓の響  
人の情の薄きを知りぬ

あゝ光明よ里のいづこ  
心の窓をひらきはなちて  
聲をかざりに祈りし姉が  
小百合の露にねぶりたる  
その夜の夢は安らかなりき

朝露の歌

吾妹子がねがけの珠の緒をたはて  
みだるゝごとくかせに露ちる

常若<sup>とまわか</sup>にてる明星の  
光またゝく村竹<sup>むらたけ</sup>の  
うれのろよぎに消え残る  
夜の間<sup>よりのま</sup>の暗を拂ひけり

眠を去りし人の子が  
くもれる眼<sup>まなこ</sup>を洗ふとて  
立ちよる川の底清く  
眞砂<sup>まご</sup>にうごく雲の色

仰けば虚空<sup>そら</sup>の静肅<sup>しずか</sup>なる  
ろの紫<sup>むらさき</sup>のとばりより  
玉の御聲<sup>みこゑ</sup>のひゞき來て  
くしき光の射るらむか

よべにすさびし禍<sup>わざはひ</sup>の  
疲れて氣息<sup>いき</sup>のたえはてし  
むくろを西に葬りて  
まことはこゝに甦<sup>よみがへ</sup>る

歩めば袖の風かろく  
足地ちにつかぬこゝちして  
東のまがき庭の隅  
なぐさめ多き花のかず

よしや漏斗ろうとに肖にたりとも  
呼ぶよ盃さかづきの名をゆるせ  
葉がくれに咲く朝顔の  
ふくめる露をかたぶけむ

廣葉ひろはを空にたどふれば  
白きは星の夕ひかり  
蔓をかひなにたどふれば  
うすくれなるは頬の色

こぼるゝ露を縁しほ白しろの  
その盃さかづきの底にうけ  
蜜ちみつの甘汁あまじゆひやゝかに  
渴ける口をひやすかな

葉莖はぐすいしく白露の

玉水晶をつらぬきて  
ふるればさやぐ亮々の  
響の中にさとしあり

璚はなれし山雀の  
のすみをうたふ彼方より  
朝日斜にかゝやきて  
七色彩の光あり

昔は泣きし露の上に  
今よるこびを見出して  
ほゝるむ花の香をかげば  
胸のうれひのきえてゆく

### 耶蘇降誕祭

師走の辻の風をふみ  
狂うて何を求むるか  
「まこと」は其處にあらざるに  
君、會堂に來たらずや

あゝ美しくかゝやきし  
瞳は塵にくもれるか

見よおくられし聖書は  
懐にしてこゝにあり

いましが友の手をとりて  
れもひを遠く馬槽の  
昔に馳せよあでびどの  
裳裾もすそによるの非を悔いむ

記憶を今に喚びくれば  
どもに祈りし去年の日の  
たのしかりつる真情の

温かに湧くをおぼえずや

わかき血汐を塵の世の  
薄き情にさゝぐども  
とはの光をそこに見て  
愛の泉を汲み得べき

芭蕉葉そよぐ蔭にして  
義に責めらるゝ友あれば  
大波おほなみむせぶ磯岩に  
立ちて祈れる友あらむ

悪魔の叫ぶ年暮を  
靈と力のともしびの  
ひかりかゝやく窓の下  
眞心こめて祈らずや

\* \* \* \* \*

弱き我等の世に強く  
うけ得し業をつとむるに  
なつかしき日は返り來ぬ  
西曆一千九百年

嵐の歌

流しづけき里川の  
芦の枯葉のうなだれて  
牧場をかへる笛寒く  
標木林に日は落ちぬ

雲の夕やけうすれゆく  
山の端近うみだれどふ  
鴉の翼に夜の神は  
黒き帳幕をたれにけり

暗にイむ公孫樹の

雨にさゝやく聲きげば

胸乳はひえて顫くに

星の光はいづくぞや

灯どもす窓にれとづれて

唯はらはらと落つる葉の

しきるや風の一しきり

悲鳴をあげて走りゆく

後よりよばふ聲すこく

軒やたふれむ戸や裂けむ

物皆ふるひといろきて

怒の叫びいや高し

天馬の髪をうちふりて

蹄に雲を蹴はらゝかし

齒をくひしむる鼻息の

すさびや雨を横に吹く

信なき人は灯を消ちて

暗に恐怖の眼をひらき



天傾きて地立たば  
如何かせむともかくめり

口を極めてのゝしりし  
神の力によらなくに  
汝が手をあげて支ふとも  
暗いさゝかも退かむや

あけばの白く鐘鳴りて  
鼠も西に消えゆけば  
あらはになれる公孫樹は

巨人の如く立てりけり

富をほこりし村長の  
うてなの屋根は破れしに  
川にそひたる一棟の  
藁屋の軒はやれずあり

枯蘆づたひ笹啼の  
枯葉をそゝる歌きけば  
夜嵐いかにすさぶとも  
眠をうばひ能はむや

くもる鏡をぬぐふごと  
虚空は高くすみわたる  
野山にたこるよろこびの  
調や何をたふらむ

(明治三十三年十二月作)

### 新世紀の歌

一

よろこびうたふ初鶏の  
光を招く羽叩きに

暗は迷はやぶられて  
空ほの白う明けにけり

さゆりの花の花片に  
ふれし口紅そのごとく  
雲薄あかうたなびけば  
こゝろ豊かに風わたる  
清き希望をもたらせる  
二十世紀の日のかげは

愛と自由と平和の  
ひかりを胸によろほひぬ

二

かゝやく御手をさしのべて  
波しづかなる東海の  
あしたの面を撫でゆけば  
底の真珠の清きかな

光をうかべ巖ひたし  
美しくわく新潮に  
白帆をあげて漕ぎ出づる

かこよその身に幸はあれ

三

真砂地つゞく松原の  
磯岩かげの白き墓  
ねぶれる夢をわたゝめて  
とはの秘密をてらし行く

あゝ無慘なる戦争よ

あしたの花を踏みにじり

夕風さむき窖あなぐらに

たゞ白骨を葬りぬ

夕何ぞ灰ばこり  
榮譽よいづこ汐ぐもり  
地の安けさをさへぎりて  
悪魔の勝をほこるのみ

さきの世紀の文明よ  
まことを歌ふ笛弱く  
狼どもの時を得て  
迷ふ羊づうたれける

四

たのしき草の岡こぼて  
雑木林をめぐりゆく  
小川の水に口そゝぎ  
ちひさき橋を渡りけり

かすむ野末の藁小屋の  
やぶれし軒に立ちよりて  
疲れし翁どく起きよ  
なが世は既に明けたるに

五

羊のむれをあはれみて  
鞭うつものを追ひはらへ  
肥えたる牛を引き出でて  
かの清き乳に口づけよ  
牧場の前にたへたる  
みづうみ春の香を浮けて  
緑の水のさいれ波  
何にうれしきえまひぢや

羽がひならべて鴛鴦の  
ねぶる頭かしらを染めてゆく  
ぬくき日かけに圓かなる  
夢の御胸を抱くらむ

六

塘堤つづみの柳影ほそく  
歌ひゆくなる若き子の  
やせたる肩に手をよせて  
苦がき涙をぬぐふかな  
不義のわめきに聳たかひし

耳をひらけよ烏婆玉の  
ひろひろ暗は晴れたるを  
何に閉ぢゆく眼ぞや

大波高くすさぶとも  
鷗は浮きて沈まじな  
希望にかへれ暗潮の  
そゝぐども義は隠れじな

七

雲をつらぬく高塔の  
そのごと見ゆる高樓の

ちさき窓よりさし入りて

悔い改めよ罪の子よ

彼の貴族をうらやみて

悪の巷によるなかれ

榮光はそこにあらざるに

囚獄人よさきくわれ

八

かくて日かげは輝けり

愛と自由と平和の

二十世紀の一日よ

たれかよるこび迎へざる

土井晚翠君を送る歌

白雲一片ちぎれちぎれて

天風國見の緑を撫づれば

靈弦遠く峯をとよもし

野茨花咲く廣瀬のほとり

川波清く眞砂に咽び

山水心ありて君を送るに似たり

さらば別れて君行くらむか

しばし野調に耳を傾け

微笑を残して手を分たすや

こゝに袂を拂つて立たば

平原なほ且君をへだて、

たちまち影は麥に隠れむ

三たび魯西亞の暴虐を罵り

優柔に馴れ心をこれる

大和嶋根の人をむちうち

眠れる心耳にひゝかじめたる

長詩短詩それたどふれば

鶏あしたに歌ふ聲か

わづかの安きを偷みて眠り  
花に酔ひしれ月になしみ  
胸せまくして心ちひさく  
黄金の佛ぶつを崇めて詩の神を容れず  
一代の趣味ほろびむとして  
わづかになぐ一縷のひかり

あゝ願くは詩人によりて  
眞と美と愛との油をさし

いのちをあたふる星の如く  
暗かみをてらして輝かしめば  
このあはれなる人を導き  
いさゝか國を救ふを得むか

更に世界のねもてを見れば  
雲黒うして風なまぐさく  
血を以て血をあらふつるぎ劍  
同胞いくたびかはづかしめらる  
人道をさけび平和をよばふ  
ろの聲いまだやむべからず



たほいなるかな君が抱負  
この邦いまだ捨つべからず  
どつくにの皮想に酔ひて  
歸來すなはち喇叭を吹き  
學をてらはむ君ならず  
われ喜びて送らざらむや

二年七百有餘日

英京の河テムスのほとり  
さゝやく水に耳をかたぶけ

去りて來因の月に棹さし  
身は瓢揚の雲に乗りて  
想をどほく天にや馳する

もしうれアルプスの頂を極めて  
ふたゝび登高の賦を作り  
世の文明を罵らむ時  
葡萄色濃きポー川の岸  
筆をたのしき秋の香に染め  
あめつちの美に口づけむ時

ふりし羅馬の跡をたづねて  
千年の遺流をさかのぼり  
藝術の前にイまむとき  
舟にはるかに沈まむとする  
弦月のかげを吊はむ時  
君が詩囊のおもさいくばく  
うらやまいしかな君がこの行  
身に聊かのかゝつらひなく  
居るべきに居り行くべきに行き  
自由の翼に雲を羽うちて

美の影を追ひ哲理を辿る  
これよりまされる快樂あらむや  
さらば別れて君行くらむか  
天地有情の夕ぐれひとり  
鐘に無言の呪ひを悟り  
いま曉の鐘をならして  
しばしかくれよ歐の山水  
ふたゝび詩壇の春に逢ふべく

(明治三十四年六月二日作)

麥刈

一

麥刈時はちかづきぬ  
告天子巢立ちてはや幾日か  
親は子を呼ぶ麥のうれ  
子は飛びにけり穂の高さ  
よわき翼を羽叩きて  
空のひかりを戀ひしたふ  
春に緑の波うちて

風より風に撫でられし  
麥はた夏の手にふれて  
こがねのみいり日に予照る  
やがて羽根成り力得て  
告天子は雲に入りけり

二

麥かり時はちかづきぬ  
夫にわかれてはや幾日  
うれひの谷をさまよひて  
木の下闇路草の道

涙のしぶき瀧むせび  
暗より暗の深きかな

神よちひさき吾を救へ  
こゝろの窓もどちはてぬ  
なげき、苦み、うき惱み  
時にあらしの影となり  
時に悪魔の氣息となり  
たそひころ來れ分一分

あゝ、絶望の崖の前

くるめく眼おのゝく手  
愛をさぐらふ今の身は  
巢をうばはれし子雀の  
親よぶそれにことならず  
\*\*\*\*\*  
かくて夕日も沈みけり

三

麥かり蟬は鳴きいでぬ  
光かゝやく天の日は  
あしたの空をいろどりぬ  
村のわかもの少女等も

年のみのりをよろこびて  
刈るべき麥を刈りとりぬ

げに類たぐひなきみのりなり  
こゝに移りてこゝに住み  
夫つとと耕し植うえしより  
かゝるみいりはあらざりき  
稔なりれる畑はたけにおり立ちて  
刈るべき夫つとは世にわらず

かり株かきひかる畑中の

むぎのはたけの我が麥に  
力ある日のかゝやけど  
心のいたみ負へる身は  
時に窓よりながめ見て  
わづかにゑむよ何の幸さいき

四

神よかよわき吾ちを救へ  
呼べども手をばどらざりき

＊ ＊ ＊  
うれひ悲み泣きに泣く

身は穂の影と瘦せぬども  
たれか秘密の鎌とりて  
心の草をはらふべき

ねのゝく足をふみしめて  
栗鼠の葡萄による如く  
畑に麥を刈りうめぬ  
光の巨人こそわけて  
はたらくものは幸なりと  
耳の鼓を撫で去りぬ

ねほふ憂愁の雲はれて  
こゝろの窓はひらけたり  
夫の笑顔もさながらに  
いのりさゝぐる聲の中  
あゝ新しき命を得て  
よみがへりたる心地かな

清 怨

かの鴻鵠の花を蹴て  
雲のあなたに去る如く  
泰西の藝術を慕ふ身は  
理想の翼香をうちて

あけぼの遠くわかれにき

ねもへば夢か春の夜の

ひかりかがやく燭の下

君、蒼白き額撫でて

吸ふ酒杯のながくとも

人の情とえまれしを

著作か彼れはかりそめの

筆のすさびの戀がたり

りの作者ぞと指さゝれ

いまさら君にはづかしと

眼鏡のくもり拭はれき

その姿、容貌その言葉

いくとせ経とも忘れむや

誰れか女は紫陽花の

色にも似たる愛といふ

見よくれなるの胸の火を

もえてエトナの火とならば

君、かの國に見るべきを

興津に病める朝夕は  
芙蓉の雪の清き見て  
つめたき胸とればすらむ

しぼるは何の涙ぞと  
友に問はれてうち背き  
雁かりならずやと戸を推せば  
今宵は月もおぼろにて  
霞にしづむ鐘の聲

いくとせ戀にあこがれて

瘦する障子の影見ても  
われこの鐘に恨あり  
胸の血いたくわなゝきて  
えたへぬれもひ知るや君

れもへば夢か春の夜に  
見し面影を夢として  
さかえの花を目にも見ず  
むなしく陸奥の野に老いて  
あゝとこしへに戀ふべきか



愛宕山に登るの歌

夏の日俗の千衢におちて  
塵のすさびに眼はくもり  
人のわめきに心耳もしひて  
遊子現世のうれひに堪へず  
ひとり愛宕の高きに登り  
夕ぐれ廣瀬の風を抱いて  
はるかに詩國の美を戀ひ慕ふ  
残る日本立の影をおとして  
をろちの流に横たふごとく

麓の野を染め畑をうめぬ  
黄鳥うしろの谷間に老いて  
泣くか歌ふか悲哀のひとふし  
ろいろに心の琴をふるはせ  
吟興しきりに動いてやまず

林にかくるゝ町の薨は  
左右におほどり翼を張りて  
南に名取の青田を羽うち  
北に青葉の山をねさへて  
十里の宮城野胸毛むなげにうよぎ

黒きは島かけ虚空にあはく  
潮路のひとすぢ霧に眠れり

れぼろの薄絹ねほふ神秘の  
帳幕をはらひて遠くどほく  
眼の力のねよばむかぎり  
吹き去り吹き来る扶搖の嵐  
さかまく萬里蒼溟の波  
つきせぬ恨のねとを遺して  
きえせぬうれひの色を含みぬ

わが敷島の大和嶋根の  
蒼生ねぶれる鎖國の眞夜中  
船に羅馬を訪ひしますらを  
むなしく故郷の露と碎けて  
昔にうもるゝ北山のほとり  
問はば如何なる事か答へむ  
小笹そよぎて蜘蛛の子みだる

げに蜘蛛の子の袋をかみて  
離ればなれにとび散る如く  
人をあなぢり友を傷つけ

力をあはすも花の一時  
胸せまくして豆をも容れず  
思へ、これ汝が父祖の心か  
政宗きかば地下になげかむ

あゝ瑞巖寺海にのぞみて  
遙に世界の潮をはらみ  
瑞鳳の峯木立のみどり  
なほも昔の跡をどどめて  
春風秋雨三百餘年  
城はやぶれて墓荒れぬとも

雄圖を今に語るに似たり

立て、みちのくの草に潜める  
詩人哲人無名の偉人  
なが兄弟はやみちに迷ひ  
をこりの風に腕もなえて  
宗教を售り私慾に渴き  
詩美を解せず小利に走り  
子平の名を説き道を忘れぬ

俗僧墓の石につまづき

經文きやうもんをうりて妾をたくはへ  
佛の御像みずがた年のはに錆び  
神主黄金こがねにうなねつきぬき  
御符みふのひとひら民をまどはし  
かたぶく社を朽木にさへへて  
渴仰を強ひ迷信をひさぐ  
あゝ願くは罵る吐息よ  
愛岩の山の嵐となりて  
かれ等の心を寒からしめむ  
若かず古鐘の撞木しゆもをとりて

力ある音むかしの響  
五城樓下の夢をやぶりて  
光明ひかりと真理まことにかへらしめむか

立秋吟

琴を葡萄の蔓にかけ  
葉分の風に女神めがみが  
秋のれもひをかきなせば  
戀になやめる人の子は  
うれひの耳をかたぶけぬ

曲まがにおどろく乙鳥は  
すゞしき秋のひかり見て  
古巢ふるすの乳燕ちびを呼びさまし  
舞まを教へぬいくたびか  
南洋の雲羽打つべく

青天あそら秋の香をこめて  
理想の國は遙かなり  
乙鳥ならぬ人の子よ  
うれひの園を立ち出で、  
こゝに詩歌うたをさぐらずや

田園雜詠

其一 一人に答ふ

才さいはちけたる少女子の  
琴になぐさむわれならば  
葉風さみしき草の戸に  
病をなべてやしなはむ

われは智慧なき少女子の  
たのしくうたふ鄙ひなぶりに  
思はず耳をかたぶけて

ひとりほゝゑむ身なるぞや

あゝ病めるまの手すさびに

こゝのけしきを寫すべく

われのおもひをうつすべく

笥の水に筆をあらはむ

其二 葡萄をおくられしを

謝する歌

葡萄の房の一粒を

口にあつればうま酒の

甘汁いたくしたゝりて

渴ける舌にうぐかな

うれひに沈む人の子の

泣きつくしたる後のごと

罪になやめるわかうどの

神のゆるしを得たるごと

檻にあきたる小羊の

牧場の草を踏むがごと

籠にやせたる山雀の

森をしたひて去るがごと

又は夕ぐれ雨すぎて  
小草の露に起くること  
熱になやめる苦しさも  
その甘汁にながれけり  
さながらわれは博士等の  
一つの星を見いだして  
無限の微笑にあたらしき  
いのちの前によみがへる

あゝかくまでに美しき  
葡萄の味は知らざりき

もはや筆に疲れたり、筆をこゝにどゞめむ。許  
したまへ、われはわがまゝなる男なり。二粒、三  
粒、舌の溶けむれもひ、いまだ五粒をつまゝさ  
るに此の歌をたぐらむ。あはれやしき葡萄の  
君よ、君はとこしへに神の幸を受くべきなり。

其二 美しき夢

東雲のまだゝきに星たちて  
白露おもき朝顔の  
ふゝめる蕾うちひらく  
くしき力に蔓うち顔ひ葉は戦ぎ

葉うらの花にさゝやけば

琴の緒きれて空に鳴る

ひゞきかすかに

玉水晶のきしる音

遠くさやかに

かなづる曲のしばしとだえて

くれなゐふかき花びらの

中より小さき蜂とび出でぬ

いな蜂にあらず蝶にあらず

そも何ぞ

翅あり蝶の翅にあらず

聲あり蜂のうなりにあらず

そもなにぞ

あやしむなかれ花の上に

立てるは清く美しく

光かゞやく愛の女神

と見るまに

蕊は螢の如く飛び散り

葉は炎々の焰となりぬ



れもはすすくみ目くるめけば  
二つの翅雨の脇に生ひ  
輕き身地みぢの上をはなれて  
のぼるは光の空の彼方あまた

唯女神のゆくがまに〜  
雲を凌ぎ星を抱き  
舞ふが如く飛ぶが如く  
すゝめど涯はたなくきはみなく  
何處かつひのとまりなるべき

あゝ、翅疲れ身は重く  
下界の花をながめ見て  
浮世の戀を思ふ時  
夜は明けぬ露は落ちぬ  
我にかへりぬあかつきの夢

其四 桐の葉裏に書きつけ  
たる歌

新しき秋

清き秋

汝をさきだて、音づれぬ  
風、詩をふくむ月の夕ぐれ

涼しき秋  
樂しき秋

いましの翼に乗りて來りぬ  
蟲樂をひく露のわけばの

秋の夕ぐれ

灯を剪りて書<sup>ふか</sup>を讀むべく

秋のわけばの

野邊に自然の聲をさくべく

あなうれし

なれを一葉を水にうかべて

棹さし行きて

美しき詩の園にあそばむ

其五 さらば

わがなづかしき田園よ

夏の日君がふところに

やすき眠をむさばりて

氣のおどろへを養ひき

無心に雲のとぶを見て

芭蕉の窓に詩をおもひ  
可憐や稚兒の蟬を追ふ  
その小手うちにはほゝゑみぬ

かくて夏去り秋立ちて

唐黍畑の風青く

つまくれなるの花ちりて

はらはぬ庭よ雨白き

その雨しろき朝ぼらけ  
君が腕をぬけ出でて

更に力をためすべく

塵の巷に行かむとす

さらば夏秋五十日

吾をなぐさめし田園よ

稚兒よ少女よわが友よ

別れむさらば幸くわれさらば

回顧吟

白虹雲を貫く湖畔のゆふべ  
ひどり草を籍きて遠く見やれば

暮靄濛々芦にせまりて  
つゝみをはんぬ蒼茫水村の景

吁惆悵として首をめぐらす當年の我  
十三既に懷疑の子青春二十失意の人  
田園に隠れむと欲して隠れ得ず  
半生兒童の師となりて江湖にさすらふ

男子一片稜々の氣を抱いて  
僅に詩にやる滿腔憂憤のたもひ  
しかも千篇万章の詩味蠟の如し

やんぬるかな取つて湖面に擲たなむか

朝顔

愛の女神のくちづけに  
うちほゝゑめる朝顔や  
清きかうべをもたげつゝ  
露の眞珠をよそほひて  
空に希望の手を伸ぶる  
籬にあけの星一つ

渾圓球上平和の曲

長風尾にうつ天馬背に

白銀かがやく鞍をたきて  
世にたぐひなき増荒猛男が  
ゆたに跨り轡をとるも  
蹄に歐亞の野をふみにじり  
米阿をしたがへ濠を靡けて  
全球掌裡に歸するを得むや

小さき心と人もしいは  
豺狼あくなき慾をわらはむ  
夜すがら恐怖の眼を開きて  
鑄る大砲は何せむためぞ

ひねもす劔の鞘をはらひて  
叫ぶか、血に飢え渴ける聲は  
狂人影追ひ走るに似たり

猜疑の黒幕かたくおほひて  
われから闢なる岩屋にこもり  
悪魔のかひなに生命を托し  
やいばを以て刃に報い  
尺を争ひ寸を伸ぶるも  
地の圖に割する赤と青とは  
人道史上榮譽のいろか

ろの色地球の半を保たば  
けだし世界の王たるべきか  
否、文明の皮をかうふり  
説くに博愛誣ゆるに野蠻  
甘言もちゐるなきに至れば  
弱きにのぞむ砲火の光  
かくて罪なきかうべは飛びぬ  
強きをたのむ兇暴残忍  
彼れ等の前には道なく理なく  
うはべに聖なる神をたへて

うちに無量の野心をのゝみ  
人種の差別、異教の民  
討ち亡してとらずばやまず  
あゝ人道の意義とはこれか  
等しく自由を口に唱へて  
麻尼刺に加へしつるぎは何ぞ  
ひとしく博愛口に唱へて  
支那にくはへし砲火は何ぞ  
誰れか博愛自由のために  
罪をならして惡懲すべく

銚をいだきて怒らざらむや

よいかな三千ボアの國民

米魯さながら兇英の軍

その兇銚を三どせふせぎて

全く正義のほろびうせぬを

世に知らしめしトランスバール

上天なむちを救はざらむや

振ひて義軍の名に背かずば  
最後の勝、星のかゝふり

期せずなむちの前に輝き

星斗しづかにふるひ動きて

野によろこびの百合の歌

平和の光とこしへに照り

萬邦の民これを仰がむ

れもへ、鐵蹄五州を蹴るも

血と罪惡と二つの外

そこにどゞむる何の痕ぞ

一だひ地の圖を赤に染むとも

たちまち反きて刃をとらば

もとのむらさき曙の色  
山河ふたゝびよみがへるべく

義しきものは幸なるかな  
無疆の靈の翼によりて  
あゝ全球の蒼生を支配し  
世界を何の色にも染めず  
正義と自由の圈をゑがきて  
愛の泉のつくることなく  
平和の光にいろどらしめよ

(明治三十四年九月五日初稿)

宮城野よ立ちて

秋九月西吹くゆふべ  
宮城野のほとりに立てば  
雲ちぎれくれなるにどひ  
たくれたる燕かなしむ  
さびしさの胸うちなでて  
物ぞ思ふ惆悵として  
うつろひし野べの面影  
かはりしよ誰れの心を



萩いづら大根のはたけ  
虫いづら馬蹄のひゞき  
賤の男は鍬をよなひて  
鄙ふりを唄うてすぎぬ

かへり見る細長き影  
くもる日にうすれこそゆけ  
戀むなし影のごとくに  
身はほろり思瘦せたり  
てれる日に影あらはれて

陽炎や胸まぐもゆる  
もえくればあまりに苦し  
きえゆけばあまりに淋し

ろれ歌をねもふ心は  
少年の戀にかも似る  
うつくしき野べの夕やけ  
見わぐればわれに鳶どぶ

清風明月行

常に天上の樂を慕うて

れもひを浦曲の清風に寄す

日本史ありて三千餘歳

その開明の御世に生れて

太平の歌、鼓をうたず

却てうれひの曲ぞかなづる

仰げ、至聖のめぐみあふれて

民草原の上に降れども

文臣みだりに色をたしなみ

武臣黄金にるみを傾け

道念光明は風のともし火

ニウス魔を刺す筆を揮ふも

裏、罪惡の影をうつして

多くの人の歡心を買ひ

社會の眼を開くに足らず

宗教、俗に媚びへつらひて

大擧傳道、虚勢を張り

もし靈魂をすくふを得なば

魚は暑き日市に腐れむや

臭も馴れたる鼻をつまみて

また教育を説くこと勿れ

内のあらそひ外に亂れて

醜、醜、吁きくにえたへず

去つて浦わに曲をかなでむ

きたれ清風颯々のひゞき

真砂路よるの露をふくみて

松影臥龍の色はかゞろく

沖べに波のは白くにはほひて

明月光いよ〜さえぬ

友よ、今宵は何を弾くべき

太平のうた譜には作らず

唯一枚の反古とはなしぬ

許せ、渡良瀬河畔の曲を

共になでて慰みなむか

.....  
腹をこやし、政治家の

月にうかれて……

顔をそむけてすゝり泣く

この民何の罪ありや

この民何の罪ありや

あゝ凄惨のしらべを了へぬ

じづかに涙の痕をぬぐひて

天心の明月にむかへば

心胸をいろに空しきねもひ

清籟地上の曲をさそうて

とほく神秘のかどれしひらき

靈の光のこゝにいわた

罪のくもりをいつか拂はむ

幸か、浮世のちまたに落ちて

曲、人間のしらべとあはず

常に天上の樂を戀ひつゝ、  
れもひを浦曲の明月に寄す

村の家

朝露こめて鶏なきて  
墨繪のことき村の家  
孟宗藪のたぐの家  
あはれその家なづかしや

真木積み下す大川の  
舟より窓をながむれば

あしたすゞしき梭の音  
ゆふべこひしき歌の聲

わかき心に想像の  
花をいだきてほゝゑみて  
日にいくたびか幾度か  
かしこを上り下りけむ

たどへばわれは若鮎の  
早瀬の星にとぶこどく  
かれは星かけ瀬におちて

鮎の鱗にぞみださるゝ

めぐればかはる泡沫や

三とせを旅に今日くれば

ことしの秋の洪水に

岸べのみどり家もなし

ひとり小草に身をなげて

日は黄に沈む夕ぐれの

真木つみくだす棚舟に

昨日の夢をしのび泣くかな

人は氣息に

ことならず

その存らふる日は

すぎゆく

影にひとし

のぼら集終

〇 刻 入 集 卷

明治卅五年二月六日印刷  
明治卅五年二月八日發行

定價金卅錢  
郵稅金四錢



著者 吉野甫

發行者 佐藤養治

印刷者 江馬耕太郎

印刷所 江馬活版所

出版元 大賣捌  
仙臺市名掛町五番地  
東京市神田區表神保町  
尙文館  
東京堂





全	心齋橋通順慶町北入東側	矢嶋	試進堂
頁	行	誤	正
一五	四	四	四
四七	三	三	三
八四	二	二	二
八九	二	二	二
九四	二	二	二
一〇二	二	二	二
一二八	一	一	一
一三六	一	一	一
一五一	一	一	一
一六八	七	七	七
一六九	五	五	五

甚次書房 常吉書房 倉吉書房 陽書堂 右衛門 平助 本淵 文淵堂 仙助 試進堂

吉野 臥著

# 小百合集

## 小百合集目次

- 勾影 ○ 秋の歌 ○ つきぬ恨 ○ 冬の歌 ○ 花
- の歌 ○ 愛猫を葬る歌 ○ 病 ○ 早春の歌 ○ 鬼
- の歌 ○ 逢隈川邊 ○ 晝の夢 ○ 狂犬 ○ 病夢 ○
- 訣別の歌 ○ 雷の歌 ○ 蜘蛛 ○ 星の歌 ○ 廣瀬
- 川

東京市京橋區采女町  
 警醒社書店發行  
 定價 拾五錢  
 郵稅 二錢

新 體 詩 集

# 曉 鐘

士 井 晚 翠 君 著

是晚翠子が『天地有情』以後の作を編  
したるもの、今、王陽明の句に因り  
て、題して『曉鐘』と曰ふ。君の詩は  
世已に定評あり、新詩國の建設未だ  
全からざる今日、此書斯道に多少の  
貢献たるべきを信ず。幸よ江湖の清  
覽を乞ふ

菊版大和綴美裝本

成美書 ● 再版出來

定 價 四 金 拾 錢 ● 郵 稅 金 四 錢

主 幹 々 々 木 信 綱

# よゝろの華

每 月 一 日 發 行  
一 部 郵 稅 共 拾 壹 錢

夙に清新なる趣味を鼓吹し健全  
なる文學雜誌を以て任し新進作  
家を迎へ老耄の徒を斥け最も着  
實に歩武を進むること茲に五年  
いまた一日の間を苟するなし  
廣く文學美術の寄稿を歡迎する  
のみならず毎號題を課して長短  
歌文を募り嚴密なる校訂を加へ  
て卷末に附録として掲載す。

東 京 京 橋 區 東 豐 玉 河 岸

# 大 日 本 歌 學 會

新 體 詩 集

野 人

挿 畫 數 葉 ● 四 六 版 美 本

清 水 桶 村 著

◎夕の別れ夜の迎へ◎森の木小屋◎  
海に珠あり◎白露光◎風◎野の人◎  
羊のぬし◎野葡萄◎仙姑◎野火◎野  
べの兒◎歌女の歎◎松島歌◎小菅笠  
◎太陽の詩◎黄道十二宮◎十緒の琴  
等、三十餘篇を収めたり。

平 福 百 穂 畫

定 價 金 參 拾 錢 ● 郵 稅 金 四 錢

短 歌 美 文

新 韻 集

近 刊

佐 々 木 信 綱 君 序

此の集は吉岡文學士等新派歌人諸氏  
の手に成れる歌集なり。其の想の新  
しき、其の調の清らかなるは、讀詩  
家の認むる所、又何をか贅せむ。附  
録として佐々木信綱氏の「みちのく  
百首抄」藤園主人の「時雨日記」を收  
め、美装して世に出づる近きにあり。

吉 野 甫 君 編 著

定 價 金 貳 拾 五 錢 ● 郵 稅 金 四 錢

入江祝衛 著

# 日本俗語文法論

近刊

著者は多年、我俗語を數多の外國人に教授せるものにして、其の論ずる所斬新なり。

本書は、我俗語に行はるゝ文法を批評し、若くは之れを説明すると同時に其美點を發揮し、所謂缺點を辯護し、加ふるに英獨佛等と比較して論述せり。

故に我俗語の眞價を知り、若くは歐州語に對する其地位如何を知らんとするものは勿論、苟も言文の一致を論ず又は身を教育に委ねるものは必らず一讀す可き書なり

青 雨 作

# 草 志 ほ

美文小説

近刊

天<sup>○</sup>は<sup>○</sup>一<sup>○</sup>方<sup>○</sup>に<sup>○</sup>無<sup>○</sup>名<sup>○</sup>の<sup>○</sup>星<sup>○</sup>が<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>  
た<sup>○</sup>。<sup>○</sup>夜<sup>○</sup>な<sup>○</sup>く<sup>○</sup>其<sup>○</sup>の<sup>○</sup>小<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>眼<sup>○</sup>  
を<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、<sup>○</sup>し<sup>○</sup>づ<sup>○</sup>か<sup>○</sup>に<sup>○</sup>下<sup>○</sup>界<sup>○</sup>の<sup>○</sup>  
山<sup>○</sup>や<sup>○</sup>川<sup>○</sup>や<sup>○</sup>人<sup>○</sup>は<sup>○</sup>姿<sup>○</sup>や<sup>○</sup>戀<sup>○</sup>の<sup>○</sup>情<sup>○</sup>や  
ひ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>り<sup>○</sup>眺<sup>○</sup>め<sup>○</sup>て<sup>○</sup>樂<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>で<sup>○</sup>ゐ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>と  
下<sup>○</sup>界<sup>○</sup>に<sup>○</sup>は<sup>○</sup>湖<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ほ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>り<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、<sup>○</sup>昔<sup>○</sup>  
の<sup>○</sup>友<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ゆ<sup>○</sup>か<sup>○</sup>り<sup>○</sup>に<sup>○</sup>「<sup>○</sup>星<sup>○</sup>草<sup>○</sup>」<sup>○</sup>寂<sup>○</sup>し<sup>○</sup>  
げ<sup>○</sup>に<sup>○</sup>空<sup>○</sup>を<sup>○</sup>仰<sup>○</sup>い<sup>○</sup>て<sup>○</sup>ゐ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>不<sup>○</sup>便<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>  
に<sup>○</sup>、<sup>○</sup>青<sup>○</sup>い<sup>○</sup>光<sup>○</sup>の<sup>○</sup>波<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、<sup>○</sup>  
聲<sup>○</sup>な<sup>○</sup>き<sup>○</sup>言<sup>○</sup>葉<sup>○</sup>の<sup>○</sup>舟<sup>○</sup>を<sup>○</sup>浮<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>て、<sup>○</sup>  
ろ<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>物<sup>○</sup>語<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>た<sup>○</sup>其<sup>○</sup>の<sup>○</sup>草<sup>○</sup>、<sup>○</sup>

## ● 録 目 ●

ゆめ路  
あけぼの  
面棍の記  
朝きり  
燈籠ながし  
墓畔  
湖上の吹雪  
かたみ語り  
天女像  
つくも髪  
蝴蝶の旅  
こゝの恨

發行所 尚文館 五曲臺市名掛町地

草野 柴二 著

# 言文一致文集

洋装全一冊  
定價金四拾錢  
紙 四百餘頁  
郵税金六錢

今後の日本文体は言文一致であるといふとは最早動かすべからざる議論で其わけも長らく讀賣新聞にも見へ其他にも諸大家の意見があつただから議論はこの位ひにして今からは其の言文一致の實行に取かゝるのだ。其先鋒としては山田美妙子の次は堺枯川子の各出版されて文例を示した。しかも彼等は文例として出たので稍簡單に失する嫌ひがあるやうに思ふ。この二家に次で敢へて其欠を補ふといふほどの大望ではないが一は言文一致實行を一日も早くしたいため。一は稍繁雜な事を書いて見やうと思つて著者は此本を出すとした。種類は手紙、文、日記、論文、記事論説の文及び(羅馬文手紙の文)と雜文などを集めた

仙臺市新傳馬町六番地

## 發行所

### 東北圖書出版舍

獨逸大家グーテ原著  
日本草野 柴二譯述

# ヘルマン、ウント、ドロテヤ

洋装全一冊  
渡邊審也氏畫  
定價金廿五錢  
郵税金四錢

西獨逸の一邑に或る豪農があつた。父は素朴敬虔で、少々東洋的の專制家、母は「仁愛の乳汁」に充ちた、情深く操正しい婦人。その昔の大仕事に縁で今の良人と一つに成つて出來たのが本篇の主人公ヘルマンである。時しも彼の佛國大革命に當つてその難をさけて、この地方にきた中に、ドロテヤといふ妙齡の處女があつた。温順貞淑、俠勇、正義の徳を備へて、容姿は素より世の青年を魅するに足るほどの、青春多血のヘルマンは全くその擒となつてしまつた。ついに此兩人の上の幾多の障礙を経て目出度伉儷を契るといふのが本篇の荒筋だ。以ヘルマンとドロテヤの媒酌として活動してゐるから、面白いと受合と誰やらが保證してくれ。

## 發行所

仙臺市新傳  
馬町六番地

### 東北圖書出版舍

衆議院議員菅原傳生序  
法大學生松柏塾幹平渡信君作

製本艶麗

# 血の英雄

體裁美妙

洋裝全一冊 紙數二百四十二頁  
定價 金貳拾五錢 郵稅金四錢

作者は本縣出身年少氣鋭の士なり。常に好んで史を讀み文を作る。性稜々の氣を有し尤も挫強補弱の僻に富む。故を以て茲に血の英雄の著あり。載するところの人物は作者の日常其傳を愛讀せしもの論時に意表に出づるあるも近古の快文字たるを失はず。其首章より末文に至る間。堂々として自家の主義を吐露鼓吹するを見れば只管其意氣の大きに驚かさるを得ざるなり。若し夫れ文の溢る所に至りては巧拙論議の正否。豈に敢て深く論せんや。大方の士一本を座右に備ふるあらは。其の能く談笑し能く論評する作者の高影の彷彿として顔前に來る感あり。又た同情の禁んずる能はざるものわらんと。菅原代議士の叙文は作者の人のなりを叙して。錦上